

*Bleak House*における死と再生

玉 井 史 絵

I 死と破滅の世界

*Bleak House*は「太陽の死」を悼むかのような黒い煤混じりの小雨の降る、ロンドンの風景描写で始まる。季節は11月。街路はぬかるみ、泥にまみれた犬や馬が通っていく。「あたかも大地の表面からたった今しがた洪水がひいたかのように通りは泥にまみれ、40フィートはあるようなメガロザウルスがホルボーン・ヒルを巨大なとかげのように歩いているのに出会ったとしても、不思議ではあるまい」¹ ロンドンは、大地の創世期を思わせるような混沌状態にある。

*Bleak House*の基調をなすものは、この冒頭の風景描写に象徴される闇の世界である。イギリスの社会は腐敗と混乱の極に達している。霧とぬかるみの中心にある大法院では、数十年来続いてきた“Jarndyce and Jarndyce”の審理が延々と続けられている。数えきれないくらい多くの人々を巻き込み、破滅へと追いやったこの裁判は、いっこうに終わる兆しはない。ロンドンを包み込む霧と雨は、遠く離れたリンカンシャーのChesney Woldをも包み込んでいる。そこではダンディイズムの風潮がはびこり、無責任な上流階級の人々が、政権のたらい回しに明け暮れている。上層部の腐敗は最下層の人々にまで及んでいく。崩壊寸前のTom-all-Along'sなるスラム街には、道路掃除の少年Joのような貧しい人々が、何の助けもないままに放置されている。これらの人々を救うはずの博愛主義者達や教会も、彼らには無関心である。

そして、この「太陽の死」で幕開けた物語には、数多くの人間の死が描か

れている。物語は Lady Dedlock の破滅に至る運命を中心に展開する。Tom Jarndyce, Gridley, Richard Carstone といった人々は大法院の犠牲者として死に、Jenny の赤ん坊, Neckett, Jo といった人々は貧困の犠牲者として死んでいく。“spontaneous combustion” という Krook のおぞましい最期は腐敗しきった社会の行く末を暗示するような出来事である。Lady Dedlock を死へと追い詰めていく Mr. Tulkinghorn は、復讐心に燃える Hortense の銃によって倒される。この他にも、Nemo や老弁護士の謎めいた死や、Esther によってさり気なく語られる Mr. Skimpole の死がある。Jo は病の熱に浮かされながら、Charley にむかって次のように言う。

“They [people] dies everywheres They dies in their lodgings . . . and they dies down in Tom-all-Alone’s in heaps. They dies more than they lives, according to what I see.” (p. 383)

この Jo の言葉は、生よりも死のほうが支配的であるという *Bleak House* の世界の現実を端的に言い表わしている。Dickens は何故、これ程まで執拗に、繰り返し、死を描いたのであろうか？

Monroe Engel は *Bleak House* における死を次のように解釈している。

In *Bleak House*, as in *Dombey and Son*, death functions as a touchstone of reality. It is a measure of the wretchedness of man’s earthly sojourn, awful and profound, but—and this is much to the point—more kindly than the torments imposed by society.²

しかし、この解釈には何か物足りなさを感じる。Dickens は *Bleak House* において、死を単なる人間の悲惨な状況を示す道具として使っているのではない。彼は死を通して何かを描こうとしているのではなく、死そのものを描こうとしているのではないだろうか？

J. Hillis Miller は *Bleak House* には、無生物、生物を問わず、すべてのも

のが原初的な混沌状態に戻っていく崩壊の過程が描かれているとし、登場人物の死を、その巨大な過程の一部として位置づけている。そして、Lady Dedlock や Richard, Krook といった人々の運命は過去において既に決定づけられたものであり、「崩壊の内的な法則の不可避的な成就」(the inescapable fulfillment of an inner principle of corruption) であると言っている³。Miller の説は、小説全体の流れと個々の人間の死とを関連づけたものとして大変興味深い。

Bleak House で数多くの人々が死んでいくのと同じくらいに重要だと思われることがある。それは、数多くの人々が死にたいと願っているということである。Lady Dedlock は雨の降りしきる Chesney Wold の屋敷で「死んでしまいそうなくらい退屈」(bored to death [p. 11]) とつぶやく。Caddy Jellyby は Esther に初めて出会った日の夜、Esther にむかって、“I wish I was dead! . . . I wish we were all dead. It would be a great deal better for us.” (p. 44) と訴える。煉瓦職人の男は Mrs. Pardiggle に “we’ve had five dirty and onwholesome children, as is all dead infants, and so much the better for them, and for us besides.” (p. 99) と言う。生前の Nemo は、道端で出会った Jo にしばしば、死にたいと思ったことはないかとたずねている (p. 135)。荒れ放題の家庭に絶望している Mr. Jellyby は「子供達にとって一番いいことは、みんなトマホークで切られてしまうことだよ」(p. 369) と口走る。無論、これらの言葉すべてが本心からのものだというわけではない。しかし、様々な階層の人々が様々な状況の中で、死への願望を語っていることに、ここでは注目しておきたい。

Christopher Herbert は *Bleak House* の登場人物には「病的な自己破滅の衝動」(the neurotic impulse to self-destruction) があるという。Herbert は特に Miss Flite, Gridley, Richard といった大法院の原告達の説明し難い訴訟に対する執着を例に挙げて「破滅そのものが彼らの探し求めているものである」と言っている。彼はまた、潔白の身でありながら死刑にされることを

拒まなかった Trooper George や、身を滅ぼすとわかっている Richard にどこまでもついていった Ada Clare や、感謝されることを異常なまでに嫌う John Jarndyce にさえ、自己破滅的な心理が見られるという。そして、「実際、読者が共感する登場人物のほとんどが、この種の病的な衝動から逃れ得ないでいる」と結論づけている⁴。

Herbert のいう「病的な自己破滅の衝動」は死への願望につながる。死への願望は、もし人がそれを突き詰めていったなら、自殺という行為につながるであろう。Bleak House では二人の人物が自殺をする。大法院の訴訟の苦しみに疲れ果てた Tom Jarndyce はピストル自殺をし、生活があまりにも単調だとある日突然気づいた老弁護士は首吊り自殺をする。かつての恋人 Lady Dedlock に思いを寄せる Nemo は、そのかなわぬ思いをまぎらわそうとして阿片を飲み過ぎ、死んでしまう。彼の死は検死の結果事故死とされるが、実際には自殺に近い死である。Lady Dedlock は破滅に至る過程の中で、自己の失われた人間性を回復していった。しかし、彼女はその代償として死を選択した。彼女は Dedlock 邸から逃走する時、自殺を決意している。貧困の中で死んでいく人々は別として、それ以外の人々の死は、本人の意志さえあれば避けることもできたかもしれない。そうすることを妨げたのは彼らの内にあった自己破滅の衝動、死への衝動なのである。

ヒロイン Esther Summerson もまた、この死への衝動と無関係ではない。彼女の人生は彼女の生命を否定する言葉から始まっている。育ての親 Miss Barbary の “It would have been far better, little Esther, that you had had no birthday; that you had never been born!” (p. 19) という言葉は幼い Esther にとってはあまりにも苛酷なものであり、心の傷として残っていく。Esther の「前進」(“Progress”)とはこの言葉を乗り越えて生きていく過程に他ならない。いかにして死と破滅の世界から脱却し、希望を持って意義ある人生を歩んでいくか——これは死すべき者として生れた Esther に課せられた重要な課題なのである。

Esther の「前進」の過程において大変大きな役割を果たしているのが Allan Woodcourt である。終章での第二の Bleak House の建設は、Allan の存在があってはじめて可能となるのであり、Esther の再生は Allan を抜きにして語ることはできない。以下、今まであまり注目されることのなかった Allan の果たす役割に特に注意をしながら、Esther の死から生へのプロセスを分析していきたい。

II Esther の再生の過程 (1)

“My birthday was the most melancholy day at home, in the whole year.” (p. 18) と Esther は回想する。彼女は私生児であり、祝福されてこの世に生を受けたのではない。Miss Barbary は Esther に「お前は生れてこなかったほうが良かったのだよ」と言った後に、次のように続ける。

“Your mother, Esther, is your disgrace, and you were hers. . . . For yourself, unfortunate girl, orphaned and degraded from the first of these evil anniversaries, pray daily that the sins of others be not visited upon your head, according to what is written.” (p. 19)

こういった伯母の残酷な言葉は Esther の心に暗い影を投げかける。Alex Zwerdling はこの Esther の経験を “trauma” であると考え、 “trauma” とは Zwerdling の引用した Erik Erikson の定義を要約すれば、「あまりにも突然であったり強烈であるがために、時と共に自己に同化することなく、成長のあらゆる段階においてある種の焦燥を引き起こしながら存続する経験」である。Zwerdling は Miss Barbary の言葉の Esther に与えた影響として、私生児であるという潜在的な罪悪感と “romantic love” に対する不適応とを挙げ、彼女の心理分析を行なっている⁵。ここではまず、Esther が、伯母によって自らの存在を否定されたことからくる疎外感を克服していく過程を見ていきたい。

EstherはMiss Barbaryの言葉によって、自分自身の過去にまつわる「影」を強く意識するようになる。また、自分は誰からも愛されず、「本来なら空白であるべき場所」(p. 20)にいるのだという意識を持ち、伯母やMrs. Rachael、学校友達といった周囲のすべての人々に対して距離を感じるようになる。伯母とMrs. Rachaelの冷たさは彼女の疎外感にますます拍車をかける。彼女が生きていくためには存在理由が必要である。空白であるべき場所に不要な人間として生きていくことはできない。Estherは幼いながらも、人間は愛情なしでは生きていくことはできないということを知っていた。そこで、「勤勉で、何事にも満足して、優しくなり、人に親切にして、もしできることなら人から愛されるようになろう」(p. 20)と決心するのである。愛情を得るために不断の努力をすること——これがEstherの決意であった。そう決意することによって彼女は絶望から身を守ったのである。

Estherは幼い日の決意を忠実に守り、実際に人々の愛情を勝ち得ていく。Readingの学校では甲斐甲斐しく下級生の面倒を見て、皆から慕われるようになる。彼女はReadingで過ごした日々を回想して、“I never saw in any face there, thank Heaven, on my birthday, that it would have been better if I had never been born.”(p. 26)と言っている。人々から愛され、必要とされる人間となることによって、彼女は自己の存在理由を見出していった。愛されることによってはじめて、生きることが可能となったのである。Mr. JarndyceによってBleak Houseに暖かく迎え入れられたEstherは、そこに完全な自分の居場所を見出す。第6章、彼女がAda, Richardと共にBleak Houseに向う章のタイトルは、“Quite at Home”となっている。Bleak HouseはEstherにとっての初めての家庭であった。しかし彼女は、ただ受動的にその幸福を享受しているわけではない。与えられた勤めを忠実に果たすことによって、彼女は自らの手でその幸福を獲得するのである。Bleak Houseに着いた日の夜、Estherは“Esther, Esther, Esther! Duty, my dear!”(p.76)と自分に言い聞かせて眠りにつく。彼女はよくこの“duty”と

いう言葉を使う。Miss Barbary の言葉を否定するためには、人から愛され、必要とされるようにならなくてはいけない。そのためには義務を果たさなければならぬのである。Bleak House での彼女の義務は、Mr. Jarndyce から託された鍵束に象徴されている。Esther はその夜、その鍵を使って家の色々な錠を開けようとするがうまくいかない、という夢を見る⁶。義務を果たすことは彼女にとって、ほとんど強迫観念にすらなっていることがわかる。

物語の半ば、Esther は二つの大きな試練を経験する。第一の試練は病であり、第二の試練は母 Lady Dedlock との Chesney Wold での対面である。まず第35章で、Hawdon の墓→Jo→Charley という感染経路をたどった病が Esther にも及び、彼女は肉体的な生命の危機に瀕する。しかし、ここでは彼女の精神的な生命力が、彼女を死の危機から救っている。彼女は熱に浮かされ混濁した意識の中で、様々な心配事に悩まされ続ける。そして、苦しみながら終わりのない階段を昇っていく夢を見る。

... I laboured up colossal staircases, ever striving to reach the top, and ever turned, as I have seen a worm in a garden path, by some obstruction, and labouring again. ... I would find myself complaining, "O more of these never-ending stairs, Charley, — more and more — piled up to the sky, I think!" and labouring on again. (p.431)

“never-ending stairs”とは彼女が自分自身に課した“duty”の生活であり、一見幸福そうな Esther の生活も、実際には果てしない義務の連続であったということがわかる。しかし、それでも彼女は階段を昇り続ける。それは彼女の精神力の証でもある。Esther が次に見る夢もまた象徴的である。

Dare I hint at that worse time when, strung together somewhere in great black space, there was a flaming necklace, or ring, or starry circle of some kind, of which *I* was one of the beads! And when my only

prayer was to be taken off from the rest, and when it was such inexplicable agony and misery to be a part of the dreadful thing? (p.432)

大法院や上流階級の世界がしばしば“circle”のイメージによって語られていることを考えると、“a flaming necklace”とは、死と破滅につながるような社会全体を表していると解釈することができるであろう。Esther はそこから逃れようと必死になっている。そのようにして、彼女は生命の危機から脱するのである。だが危機から脱しはしたものの、彼女の顔には深い傷跡が残ることになる。

病から回復した後、Esther は自然界のすべての事物を、今まで以上に美しいと感じるようになる。また、人々の心の優しさをより敏感に感じ取るようになる。病という試練を経ることによって、彼女の魂が浄化されたのである。そしてその直後に、彼女は第二の試練に遭遇する。自分が Lady Dedlock の私生児であるということを知った Esther は、自己の過去に付きまっていた「影」の由縁を認識し、「実際私が生きていなかったほうが多くの人々にとってずっと良かったし幸せだった」(p. 453) と感じる。幼い日に聞いた伯母の言葉が呪縛のように蘇るのである。彼女をこの精神的危機から救ったのは Ada と Mr. Jarndyce からの愛情溢れる手紙であった。Mr. Jarndyce は手紙の中で、Bleak House では Esther がいなくなって誰も鍵を管理することができなくなり大混乱に陥っているのだと訴える。Esther はそれらの手紙によって自分がどれほど愛され必要とされているかを知り、生きる力を得る。義務を果たすことによって自らの手で獲得した愛情が、彼女を救うのである。

III Esther の再生の過程 (2)

こうして人々から愛されることに自己の存在理由を見出し、肉体的な生命の危機までも乗り越えた Esther であったが、彼女の精神には一つの歪みが

ある。それは Zwerdling の指摘する “romantic love” に対する不適応ということである。Esther は無意識下において私生児であることを「罪」だと感じ、自分には恋愛や結婚をする権利がないのだと理解するに至ったと Zwerdling は分析する⁷。彼女の抑圧された恋愛感情は、Allan について語るときの彼女の極端な寡黙さや語調の乱れからも見てとることができる。Allan との初めての出会い、二度目の出会い、Allan のインドへの旅立ち——これらすべては章の終わりで言葉少なに語られる。彼女は Allan に対する思いを感じながらも、無関心を装っている。その姿は、Esther と同じく愛情に飢えて育った Caddy が、あらゆる困難を克服して Prince との愛情を育てていくのとは対照的である。Zwerdling はさらに、病の後に残された傷跡は Esther の心理に決定的なダメージを与えたと言う。彼女にとって結婚とは、もはや問題外のこととなってしまったのだ⁸。彼はまた Lady Dedlock の秘密が Mr. Tulkinghorn によって暴かれた時に Esther が病にかかる、という事実にも着目して、次のように言っている。

The symbolic connection of these events with Esther's disfigurement seems clear. Her illegitimate birth is no longer a secret. She is made ugly in the eyes of the world. Her scarred face is the outward and visible sign of an inward and spiritual sin.⁹

Esther は Lady Dedlock との対面の後、Mr. Jarndyce から結婚を申し込まれ、それを受け入れるのであるが（第44章）、その背後には、このような恋愛を否定する心理が働いていたと見てよい。そしてこの婚約は Esther の第三の試練である。Esther は Mr. Jarndyce の求婚の手紙について、“It was not a love letter though it expressed so much love, but was written just as he would at any time have spoken to me.” (p.537) と語っている。Mr. Jarndyce の Esther への愛情は父親の娘に対するような愛情であって、恋人の愛情ではない。彼の求婚は保護者として、私生児である Esther の将来を第一

に考えたものである。Esther もまた彼を父親のように慕ってはいるが、恋人として愛してはいない。このような二人の婚約が“romantic love”に基づくものではないことは言うまでもない。Esther は第35章で初めて、Allan が自分を愛していたらしいということや、もし彼がインドへ旅立つ前に自分に求婚していたなら、喜んで受け入れていただろうと読者に打ち明けている。それにもかかわらず、彼女が Mr. Jarndyce からの求婚を受諾したのは、彼女にとって Allan との恋愛がもはや考えられないものとなってしまっていたからである。

“romantic love”の否定がどのような結果を招くのか、という問に答えてくれるのは Lady Dedlock である。彼女は物語が始まる以前の過去において、恋人 Captain Hawdon を捨てて Sir Leicester Dedlock と結婚した。第2章、物語に初めて登場するときの彼女の姿は、愛なき結婚生活を読者に語ってくれる。彼女は上流階級の頂点に立ち、「心の自然な感情」(“the natural feelings of the heart”)を押し殺して孤独のうちに生きている。彼女の心をこの時支配しているのは“bored to death”という言葉に凝縮されているような倦怠感(“weariness of soul” [p. 139])である。Sir Leicester Dedlock の妻への騎士道的な愛情は Mr. Jarndyce の Esther への保護者的な愛情と重なり合う。このような愛情を前提とした結婚が、破局に終わる可能性をも含んだものであるということは、第2章の時点で既に読者に暗示されているのである。

Esther を第三の試練から救うのは Allan である。Allan は、Esther が破局的な結婚への第一歩を踏み出した時、インドから帰国するのである。Allan との再会に至るまでの Esther の心の動きに注目したい。Esther と Allan が再会するのは第45章、場所は Richard の軍隊が駐留する Deal である。Esther は、“Jarndyce and Jarndyce”の訴訟にのめり込んで軍隊を除隊しようとしている Richard を思い止まらせるため、Charley と共に Deal に赴く。Deal に向う馬車の中での思いを Esther は次のように回想する。

At one while, my journey looked hopeful, and at another hopeless. Now I thought I should do some good, and now I wondered how I could ever have supposed so. Now it seemed one of the most reasonable things in the world that I should have come, and now one of the most unreasonable. In what state I should find Richard, what I should say to him, and what he would say to me, occupied my mind by turns with these two states of feeling; and the wheels seemed to play one tune (to which the burden of my guardian's letter set itself) over and over again all night. (pp. 543-44)

Esther の心は、Richard のことを思い悩みながら、希望と絶望との間で激しく揺れ動いている。しかし、Esther の思いはいつしか、Richard から Mr. Jarndyce の手紙へと移っていく。この時たとえ無意識下であっても、彼女の心の中で Mr. Jarndyce との結婚のことが大きな位置を占めていたと想像することは、物語の流れから考えても不自然なことではない。Richard の運命に対する不安が、自分自身の運命に対する不安と重ね合わされていくのである。こうして、馬車の中で眠れぬ夜を過ごした Esther は、早朝に Deal に到着する。Deal の陰鬱な光景を目の前にした時、Esther の心中では絶望が支配的となる。

At last we came into the narrow streets of Deal: and very gloomy they were, upon a raw misty morning. The long flat beach, with its little irregular houses, wooden and brick, and its litter of capstans, and great boats, and sheds, and bare upright poles with tackle and blocks, and loose gravelly waste places overgrown with grass and weeds, wore as dull an appearance as any place I ever saw. The sea was heaving under a thick white fog; and nothing else was moving but a few early ropemakers, who, with the yarn twisted round their bodies,

looked as if, tired of their present state of existence, they were spinning themselves into cordage. (p. 544)

霧に覆われた Deal はすべてのものが混沌としていて、彼女が見たどの場所よりもわびしい風景が広がっている。そこでは縄をなう人々さえが「現在の状態に疲れ果てて」無生物の状態に帰ろうとしているかのようである。この Deal の光景は Esther の心象風景であろう。彼女自身が死の世界の抗いがたい影響力を感じているからこそ、それが Deal の光景に投射されるのである。「現在の状態に疲れ果てて」いるのは、縄をなう人々ではなく Esther 自身なのである。

しかし、彼女たちが宿で休息をとっているうちに霧がはれ、Deal の光景も活気を帯びてくる。そして、インド船が入港するのを見た時、Esther の心から絶望が消え、希望が生れる。彼女はこの時、“a general life and motion in themselves and everything around them, was most beautiful.” (p. 544) と言っている。つまり、Esther は生命そのものの活動を美しいと感じているのである。この彼女の感情の変化の奥にあるものは何か？ それは次の箇所を読み進めていくと明らかになる。

Esther は、Miss Flite から聞いた Allan の難破船での英雄的行為を思い出し、Charley に話して聞かせる。

I told her, too, how people in such voyages were sometimes wrecked and cast on rocks, where they were saved by the intrepidity and humanity of one man. And Charley asking how that could be, I told her how we knew at home of such a case. (p. 544)

Allan は「勇氣と慈愛」とをもって、難破船から多くの人々を救った。Esther には、そのことが希望の光であり、救いの象徴となっているのである。そしてこの直後に、彼女はインドから帰国した Allan と再会する。

この後、物語は Esther と Allan の第二の Bleak House の建設という結末にむかって展開していく。Mr. Jarndyce が身をひき、彼ら二人に Yorkshire の Bleak House を贈ることによって、Allan—Esther—Mr. Jarndyce の三角関係は解決するのである（第64章）。これはいかにも Dickens らしい“*deus ex machina*”式の解決策にも思われる。けれども Allan—Esther の結びつきは、年齢という点から見ても自然であったし、何よりも、Esther の気持ちに沿ったものであった。第59章で Lady Dedlock が Sir Leicester Dedlock のもとを去り、Hawdon の墓で死んでいることを考え合わせると、Esther の再生は Allan との結婚によってのみ可能であったということが理解できるのである。

IV 新しい世界の創造

生命力の欠如ということについての Dickens の問題意識は *Bleak House* の約五年前に書かれた *Dombey and Son* にも見出すことができる。*Dombey and Son* において彼は Little Paul や Paul の母 Fanny といった、金銭万能の競争社会に対応できずに減んでいく人々を描いている。彼らは“*Dombeyism*”の世界から背を向け、静かに世を去っていく。

Bleak House に描かれた社会は *Dombey and Son* のそれよりもはるかに複雑であり、両者の単純な比較はできない。しかし、これら二つの社会の間には、Dickens の意識の決定的な変化が見られるように思う。それは、*Dombey and Son* では過去の世界に理想郷が求められているのに対し、*Bleak House* では未来の世界に理想郷が求められている、という点である。*Dombey and Son* では Paul や Fanny の生きていくことのできない社会こそが悪であり、それ以前の古き良き時代に戻ることが大切だとする立場がとられている。¹⁰ これに対して、*Bleak House* の社会は後戻りはできない。古い社会は滅び、新しい社会が生れなければならない。一つの世界が終わったところから、新しい世界が始まるのである。

それ故に、*Bleak House*では、過去から抜け出すことのできなかった人々は滅んでいかななくてはならない。大法院は、遺産やそれに関する文書といった、先祖代々の過去が蓄積される場所である。上流階級の社会もまた、大法院と同じく、過去の「先例と慣習」(p. 10)が支配する世界である。それらの場に関わる人々が破滅への道をたどらざるを得ないのは、彼らが既に、崩壊しつつある時代の一部分に組み込まれてしまっているからである。

Estherは不断の努力によって、自らの手で愛に基づく人間関係を築き上げ、自己の暗い過去を払拭した。だからこそ、彼女は破滅から逃れることができたのである。彼女がいかに強い意志力をもって、死と破滅の世界からの脱却をはかったかは、既に見てきたとおりである。そして、もう一つ忘れてはならないのは、Allanの存在である。AllanはWalesの由緒ある家柄という先祖との絆を断ち切って、Estherと結婚した。彼もまた、自らの努力で人生を切り開いていく人である。EstherにとってAllanは、新しい世界を共に創造していくことのできるただ一人のパートナーなのである。

Allanはこの小説において、Estherをも含む登場人物の救済者としての役割を担っている。その役割が鮮明になるのは、第35章でMiss Fliteが難破船のエピソードを語るときである。

“An awful scene. Death in all shapes. Hundreds of dead and dying. Fire, storm, and darkness. Numbers of the drowning thrown upon a rock. There, and through it all, my dear physician was a hero. Calm and brave, through everything. Saved many lives, never complained in hunger and thirst, wrapped naked people in his spare clothes, took the lead, showed them what to do, governed them, tended the sick, buried the dead, and brought the poor survivors safely off at last! (p. 442)

Allanの果たす役割はここに要約されているといつてよい。難破船上は死が

支配的な世界である。多くの人々は死に、わずかな生存者も生死の境をさまよっている。そのような状況の中、Allan は救いのヒーローとして、死者を埋葬し、また、数多くの生命を救済するのである。難破船上の世界はそのまま小説全体の世界と置き換えることができる。このエピソードこそは、第二の Bleak House 建設の布石をなすものであり、破滅に向う世界の再生を象徴するものなのである。¹¹

Esther は Allan との結婚から七年を経た現在の Yorkshire での生活を次のように語っている。

We are not rich in the bank, but we have always prospered, and we have quite enough. I never walk out with my husband, but I hear the people bless him. . . . I never lie down at night, but I know that in the course of that day he has alleviated pain, and soothed some fellow-creature in a time of need. *I know that from the beds of those who were past recovery, thanks have often, often gone up, in the last hour, for his patient ministrations.* (p. 769) [Italics mine]

かつて Allan は Jo と Richard の死を看取り、Esther は Gridley と Richard の死を看取った。彼らには滅びゆく者達を蘇らせるような力はない。しかし、彼ら二人が堅実に新しい生活を築いていく姿に、読者は、破滅を越えた再生への希望を見出すことができるのである。

注

- 1 Charles Dickens, *Bleak House*, ed. George Ford and Sylvère Monod (New York: W. W. Norton & Company, 1977), p. 5. 以下、作品中の引用はすべてこの版により、括弧内に頁数を記した。
- 2 Monroe Engel, *The Maturity of Dickens* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1959), p. 117.

- 3 Cf. J. Hillis Miller, *Charles Dickens: The World of His Novels* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1958), pp. 190–205.
- 4 Cf. Christopher Herbert, “The Occult in *Bleak House*,” *Charles Dickens’s Bleak House*, ed. Harold Bloom (New York: Chelsea House Publishers, 1987) pp. 130–33. Originally published in *Novel: A Forum on Fiction* 17, No. 2 (Winter 1984).
- 5 Cf. Alex Zwerdling, “Esther Summerson Rehabilitated,” *Charles Dickens’s Bleak House*, p. 40. Originally published in *PMLA* 88, No. 3 (May 1973).
- 6 この Esther の夢の部分は校正刷りの段階で削除されている。 Cf. *Bleak House*, p. 825.
- 7 Cf. Zwerdling, pp. 40–41.
- 8 Cf. Zwerdling, p. 48.
- 9 Zwerdling, p. 49.
- 10 *Dombey and Son* では Solomon Gills の The Wooden Midshipman の店が人々の愛の共同体の中心となっている。その店は第4章の時点では、時代の流れから取り残され衰退の一途をたどりつつある。だが、終章になると店は再び栄え、Gills は「実際はほんの少し時代を先取りしていたのだ」ということになる。このようなことから、Dickens はこの小説の段階では、過去の世界に対してノスタルジーを抱き、理想郷を求めていたことがわかる。
- 11 難破船のエピソードは *Dombey and Son* にも見出すことができる。物語のヒーロー Walter Gay は Barbados 島へ向う途中難船に遭遇するが、奇跡的に助かってイギリスに帰国する。Walter と Allan には、いくつかの相似点がある。まず第一に、両者とも物語の半ばで航海に出て、物語の舞台からは姿を消す。第二に、二人とも航海の途中で難船に遭うが、奇跡的に助かる。そして最後に、二人とも無事帰国し、ヒロインと結ばれる。Dickens が Allan という人物を創造したとき、おそらくは Walter のことが念頭にあったのであろう。